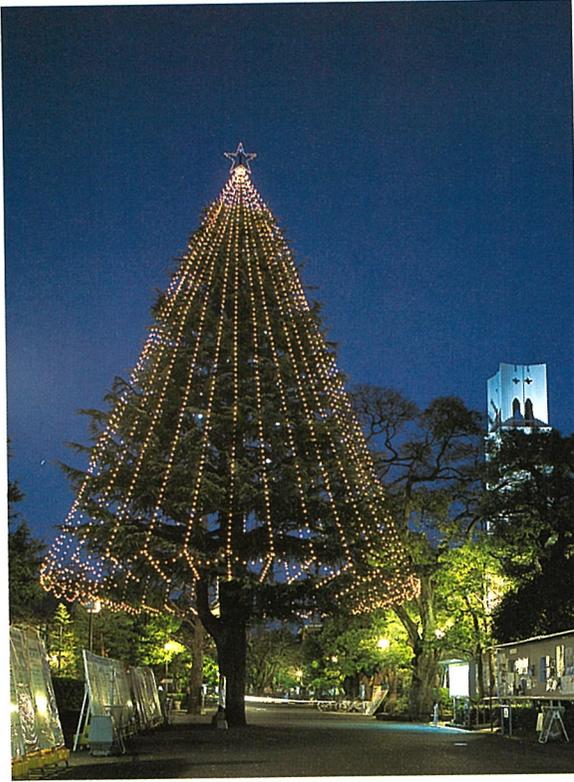


ヒ マ ラ ヤ 杉



山田 和人

(文学文学部教授)

烏丸通から西門を入つてすぐ、彰栄館の前に高さ二十メートルのヒマラヤ杉の巨木がある。昨年、この木をクリスマスツリーにしようとする提案した。京都一の高さを誇る華麗なツリーとなった。

調べてみると、明治四十四年六月に、新島襄の四人の弟子たちが、受洗(洗礼を受ける)二十五周年を記念して、四本のヒマラヤ杉の苗を植樹したことがわかった。その後、建物の新築にともない伐採された木もある。そのうちの一本が、かろうじて風雪に耐えて残ったのである。期せずして、四人の信仰の証しが、九十年の歳月を経て、クリスマスツリーとして蘇ったことになる。不思議な縁である。

いつも樹下に佇むと、常緑樹の緑の濃いたくましさに圧倒される。

元来、日本では、松は生命力の象徴であった。実は、ヒマラヤ杉は名称は杉であるが、松の一種である。セピア色の花が咲き、季節が訪れると球果(松ぼっくり)ができる。その種鱗が次々に飛翔して美しいという。ヒマラヤ杉は、同志社の歴史の三分の二を生き抜き、松としての旺盛な生命力を学生たちに分かち与え続けてきた。そして、今後も同志社の未来を壽ぎ続けてくれるにちがいない。そうした靈力に満ちた聖樹でもある。